世界諸言語における語順の地理的分布の変遷

山本秀樹（弘前大学）

キーワード：語順、地理的分布、言語変化、再建、類型論

0　序

本稿は、これまで2,800言語について語順特徴を抽出し、各地域別の語順地図および系統別分布表を作成しつつ、世界諸言語にわたる語順の分布を考察してきた結果、語順の歴史的な変遷について得られた知見を述べるものである。

筆者は、山本(1996)において、整合的VO型と(準)整合的OV型との連続地帯を色分けした語順分布図を提示すると共に、以下のことを実証した[1]。すなわち、種々の語順類型のうち、整合的VO型と整合的ないし準整合的OV型という２つないし３つの語順類型のみが、地理的に連続した大きなまとまりを成して存在し得るもので、これらが人類言語にとって、最も重要な特別の位置を占めるものである。それに対し、不整合語順類型は、たとえ種々の不整合語順を持つ言語をすべて合わせれば統計的に多数存在することはあっても、それらの中のある一つのタイプだけで地理的に大きなまとまりを成して存在することは決してなく、整合的語順類型の周辺に、地理的ないし歴史的な要因を負いつつ、しばしば推移的に存在するにすぎない。

現在の地理的分布をこのように共時的に見た場合には、確かに、整合的VO型と(準)整合的OV型が、それぞれ大きな地理的連続体を成して存在している。すなわち、北アジアからコーカサス、南アジア、さらに極東

[1] 準整合的OV型というのは、形容詞が後置されることを除けば整合的なOV型に対して筆者が便宜上名付けたもので、これらは、チベット・ビルマ諸語地域など、ある程度ユーラシア大陸の中にも見られるが、オーストラリア、ニューギニア、アメリカ大陸など、特にユーラシア大陸の外によく見られる。このタイプは、整合的OV型の亜種と考えることができるだろう。

を囲む広大な地域、また、中米と北西太平洋沿岸を除くアメリカ大陸の大半、ニューギニア、オーストラリアにおいて、整合的ないし準整合的OV型がまとまりを成している。一方、ニューギニアとオーストラリアを除くオセアニア、東南アジア、北部および赤道以南のアフリカ、西欧から南欧にかけての地域には、整合的VO型が連続した地域を占めている。また、これらの(準)整合的タイプは、前述の色分けした分布図により確認できるように、現在、地球上でほぼ同等の面積を占めていることがわかる[2]。しかし、共時的には、整合的VO型と(準)整合的OV型とがほぼ同等の面積を占める現在の分布も、現在話されている言語および記録の残っている言語から、遡れる限り遡っていくと、かつては地球上の大部分の地域がSOV型の言語で占められていた可能性が、最も高いと考えられる[3]。

1 研究上の位置付けについて

本稿に関係する従来の研究分野として、言語学内部では、言語類型論(特に語順類型論)、歴史・比較言語学、言語地理学などが考えられる。しかし、いずれの分野においても、本稿で扱うような、世界全体にわたる語順の地理的分布およびその歴史的変遷を探究するような視点は、一般にこれまで欠けていた部分である。

近年の言語類型論においては、正しい言語普遍性を得るために、地理的、系統的、類型的に偏らない言語データをサンプルに求めることが原則である(Comrie 1989, 第1章参照)。そこで、一度、偏りのないサンプルを選んでしまえば、後は言語普遍性の探究が主たる関心の対象となるために、言語の地理的、系統的な側面を捨象した状態で研究し、通常、そうした側面に再び立ち返ることはない。すなわち、言語普遍性研究と密接な結びつきを有する近年の言語類型論においては、言語の系統、地理的位置というのは、特にそのサンプリングの段階において、むしろ避けるべき要因であった。

また、語順類型論では、Greenberg (1963) による、語順に関する先駆

[2]もちろん、オセアニア地域は大部分海洋であるが、それぞれの島々に分布する諸言語は、大陸地域に劣らない言語数、多様性を持つことから、やはり、大陸地域と同等の面積とみなして差し支えないだろう。また、本稿で言っている現在とは、言語地図の作製において通常行なわれているように、できる限り原住の言語を対象にしているため、厳密には、むしろ、ヨーロッパの言語が欧州外部に急激な拡大を開始する大航海時代前に近いものであるが、その正当性については後述する(第3節)。

[3]OVSおよびOSVの節語順を基本語順に持つ言語はごく少数のため(第4節参照)、OV型というのは、実質的にはSOV型というのに等しい。したがって、本稿では、特に断りのない限り、OV型とSOV型が同義に使われていることに注意されたい。

的な研究以来、主に、言語内部の整合性に着目して、言語普遍性の探究を目的としてきた。そのため、たとえば、統計的語順分布に対して、機能的説明を探究したTomlin (1986)、厳格な含意的普遍性の確立を求めたHawkins (1983) に代表されるように、個々の言語の地理的ないし系統的分布とはほとんど無関係に、種々の語順特徴の組合せのタイプに見られる統計的な偏りに主な関心が向けられ、言語内の視点から言語普遍性を探究するものが大部分であった[4]。

歴史・比較言語学では、周知のように、音韻、形態面の研究が主であり、語順のような統語面の研究は、厳密な証明手段を欠くことから、伝統的にはほとんど対象となることがなかった。近年になって、語順類型論に対する関心の高まりと共に、語順再建の試みも、ある程度は行なわれるようになってきたが、それも、ごく一部の、特定の語族ないし語派に対する部分的な研究に限られ、より広範な、グローバルな視点からの語順変遷に対する研究は皆無である。また、比較言語学においては、原則として、同系言語内部における分岐を中心とした見方が主であって、系統の異なる言語同士の接触による収束の現象については、比較的狭い範囲において、個別に借用、言語連合として言及されることがあるという程度で、やはり、広域にわたるものは少ない。

言語地理学は、地理的にも系統的にも狭い範囲において、同系言語内や同一言語の方言間の地理的な変異を対象としたものに限られ、系統の違いを超越した諸言語間の研究、特に、地球規模での地理的分布を対象とすることはほとんどない。

そこで、本研究では、これらの言語学の中の、ある特定の個別分野だけの視点にとらわれず、さらに歴史学、考古学、自然地理学、人類学等、言語学以外の諸分野の成果も含めた総合的な観点から、地球規模での語順分布の変遷を探究する。

2 各地域における語順の地理的分布の変遷

本節では、いくつかの地域に分けて、語順の地理的分布を遡っていき、多くの地域において、古くはSOV型語順が占めていた可能性にたどり着

[4] こうした関心の対象、方向性は、さらに90年代に入って、たとえば、語順類型の統計的偏りに対する説明原理を心理的な処理のプロセスに求めたHawkins(1994)なども同様である。ただし、そうした研究およびこの節であげた諸分野における、それぞれの研究自体の重要性を否定するものでは、決してない。単に、本稿で扱うような視点が見過ごされがちであるということにすぎない。

くことを論じていく[5]。

ただし、直接的な記録の残されていない祖語ないし古い時代の語順というのは、音韻などと異なり、比較言語学的にも、厳密な再建、実証が困難、あるいは本質的に不可能な問題であることは、断っておく必要があるだろう。たとえば、言語内的に起こり得る語順変化の方向性に関して、Vennemann (1973; 1974) による研究などもあるが、以下でも各地域について見るように、現実の語順の地理的分布を見ると、語順は周辺の言語と言語連合を成しやすく、従来考えられていた以上に、言語接触のような外的要因によって種々の推移をすることが多い。そのため、厳格な変化の方向性を規定することによって以前の語順を再建することには、大きな限界がある。

したがって、古い言語の語順再建は、現在の言語や記録の残った過去の言語の地理的な分布や、それらの言語に見られる痕跡、過去の言語との比較などから、種々の状況証拠を積み重ねて、最も高い可能性を推測していくという、推論によるものにならざるを得ないであろう。しかし、そのような限界を負いつつも、以下に論じるように、記録の残る言語を基に、通時的に語順を遡っていくと、大部分の地域が結局はSOV型語順に帰着するということは、やはり看過できない点であろう。

2.1 印欧、ウラル諸語地域から西アジア

印欧語は、東部と西部において、きわめて対照的な語順が分布している。すなわち、西欧から南欧にかけて整合的VO型言語が分布し、その他のヨーロッパの印欧語は種々の不整合性を持っているが、少なくとも節語順に関しては、島嶼ケルト語のVSO（cf. かつてヨーロッパを広く覆った、死滅した大陸ケルト語はSOV）以外、SVOである。それに対し、最も東側に位置する、南アジア北部のインド・アーリア諸語は、一般に整合的OV型である。また、イラン諸語は、西部にはペルシャ語のように節語順がSOVである以外VO型になる言語もあるが、特に東部を中心に整合的OV型が分布している。しかしながら、現在ではVO型が優勢なヨーロッパの印欧語も、一般に時代を遡るほど、OV的な語順特徴がより多く見られることなどから、印欧祖語の語順は、Lehmann (1974) や松本 (1975) の

[5] 世界全体にわたる共時的な語順の地理的分布について、ごく簡略な概説は、山本 (1996) において、また、より詳細な論述は、現在改訂中の筆者の論文、A Survey of Areal Distribution of Word Order around the World の中で行なっている。

指摘するように、やはり整合的SOV型であった可能性が最も高いと思われる。ただし、古い印欧語に一般に見られるように、その語順の自由度は比較的大きなものであったろう。このように、アジアにおいてOV型が支配的なのに対し、ヨーロッパではVO型が優勢という対照的な地理的分布を示している現代印欧語も、古くはSOV型であった可能性が高い。

ウラル諸語は、北欧から西シベリアにかけて分布するが、東部のサモエード諸語およびオビ・ウゴル諸語が整合的SOV型を示すのに対し、西方のフィンランド語、ラップ語、エストニア語などは、SVO, PO/pr, GN, AN, NR/rn, SMA/AMS, AUXVのように、OV型とVO型が混合した語順を示し、地理的に両者の中間に位置するウラル語は、フィンランド語等より低い度合いでVO型語順を混成させている[6]。このように、ウラル諸語には、整合的OV型の言語は存在するのに対し、整合的VO型の言語は一つもない。また、ウラル諸語の分布する地理的位置を見れば、整合的OV型の見られる東方は、それと同じ語順の大きなまとまりを成すアルタイ諸語の地域であるのに対し、OV型とVO型の混合した西方は、前述のようにOV型からVO型へ推移しつつある印欧語地域にあることがわかる。そのことからも、やはり、西方では本来のOV型語順にVO的な語順特徴が混成するようになったと考えるのが自然であろう。このように、ウラル諸語もまた、時代を遡れば結局SOV型語順にたどり着く。

トルコからアラビア半島、イラン、アフガニスタンに至る西アジアに話される主要な現代語は、トルコ語を除けば、大部分、セム系およびイラン系の言語である。トルコ語はもちろん、他のアルタイ諸語と同様、整合的SOV型である。イラン系の言語は、先に述べたように、現在は整合的SOV型または混合型の語順を持つが、元来はSOV型の語順を持った印欧語である。それに対し、セム系の言語は、現在、西アジアにおいて整合的VO型のまとまりを成して存在している。セム語を包括するアフロアジア語族の祖語は、8,000年前から7,000年前の北アフリカ（サハラ地方）で話されており、その後、セム祖語が7,000年前から6,500年前に、乾燥化の進行に伴ってアジアに移動したという可能性がある（鈴木1990, 35-36）[7]。アフロ・アジア語族全体についてはアフリカの節で述べるが、これが

[6]略号は、一般に語順類型論で慣習的に用いられているものに従っている。すなわち、S＝(節語順における) 名詞主語, (比較構文における) 比較の基準、O＝名詞 (直接) 目的語、V＝動詞、PO＝後置詞、PR＝前置詞、N＝名詞、A＝形容詞、G＝属格、R＝関係節、M＝比較の標識、AUX＝助動詞である。また、/は共存を示し、小文字は、共存する語順のうち、より基本的でない方の語順を示す。

[7]原著では、アフロアジア祖語ではなく、共通セム・ハム語という言い方をしている。周

北アフリカにおいて古くからVO型語順を示し、それが西アジアにも及んだものとすれば、VO型語順は、必ずしも西アジアに本来存在した語順とは限らない。たとえば、系統不詳のシュメール語は、SOV, PO, NG, NA, NRのような、名詞句語順にVO型を含むSOV語順を持っており、後来のセム語であるアッカド語の節語順をSOVに変えてしまうほどであった。そして、共通語的な役割を果たす言語が、アッカド語から、おおよそ前8世紀以降は整合的VSO型のアラム語へと移り、さらに8世紀以降のイスラムの拡大と共にやはりVO型（古くはVSO、現代口語の多くはSVO）のアラビア語が広がるに従い、西アジアを広くVO型が覆うようになっていったものと考えられる[8]。つまり、現在の西アジアにおけるVO型の広がりは、西アジア本来のものというよりも、北アフリカとの連続でとらえられるもので、古くは、少なくとも現在よりはSOV型ないしそれに近い言語が存在していた可能性は考え得るだろう。

その他、これらの地域に話される言語としては、コーカサス諸語、バスク語などがある。バスク語は準整合的SOV型である。コーカサス諸語は、北西コーカサスが準整合的SOV型で、北東コーカサスの一部にSVOで前置詞を持つものがあるなど、わずかな例外を除けば、概して整合的なSOV型である。したがって、コーカサス諸語は元来SOV型語順で、周辺のヨーロッパの言語との接触によって、一部VO的な語順を獲得してきた可能性が高い。これらの言語は、印欧語が広がる以前から話されていた言語であることが知られており、やはり、古い時代におけるSOV型語順の優勢を示唆するものと言えよう。

以上見てきた言語に加えて、死滅した、種々の系統不詳の古い言語が存在する。これらの言語の多くは、記録が不十分で、基本語順を抽出し得るものはごくわずかである。しかし、この地域については、かろうじて基本語順の知られる言語が、少数ながら存在する。すなわち、エトルリア語、ウラルトゥ語、エラム語、フルリ語、ハッティ語等である。これらの言語の中には、名詞句の語順に関しては、先に見たシュメール語と同様に、修飾語が後置される例も少なくないが、少なくとも節の基本語順についてはSOVのものが大部分である。

知のように、古典的なセム・ハム語族とグリーンバーグによるアフロアジア語族との間には若干の違いがあるが、同書では、セム・ハムを概ねアフロアジアに相当するような意味で使っているようである。

[8]アフロアジア語族の拡大の歴史については、矢島 (1985) を参照。

2.2 アルタイ、旧シベリア諸語地域および南アジア

アルタイ諸語は、先に見たウラル諸語とは対照的に、地理的分布が概ねアジアに限られることを反映してか、語順は非常に均質的で、整合的SOV型の連続地帯を形成している。唯一の例外は、SVO, PO, GN, AN, NRのような語順をとるガガウズ語であるが、これは、バルカン半島においてVO的言語に囲まれているために、接触により、VO的な語順を一部に持つようになったと考えられ、同語族の中では例外的な存在であろう。したがって、アルタイ祖語の語順は整合的SOV型で、特に他の語順を考えるべき根拠はないようである。

シベリアにおいてウラルやアルタイに属さない、互いの系統証明の困難な言語の集合体である旧シベリア諸語は、イテルメン語（SVO/sov, PR, GN, AN）のように、VO的語順の混成した言語も一部に存在するが、整合的SOV型の言語が大部分で、上述のアルタイ諸語と共に、ユーラシア大陸北部において、広大な整合的SOV型語順の言語圏を形成している。また、旧シベリア諸語に通常入れられているエスキモー・アレウト諸語は、準整合的SOV型であるが、これは後述するアメリカ大陸の準整合的SOV型地域と連続している。旧シベリア諸語は、チュクチ・カムチャッカ語族のように少数の言語の範囲では系統関係が見られるが、全体として一つの語族を成すわけではない。したがって、祖語の語順を問題にすることはできないが、全体の語順は、このように斉一的であると言える。旧シベリア諸語の話者は、特にツングース諸語が拡大する以前は、北東シベリアの広い地域に住んでいたと言われており（鈴木 1990, 75-76)、おそらく記録を残すことなく消滅した言語も少なくなかったと思われるが、今日残されている言語の語順特徴や地理的位置および歴史から考えて、一部のVO的語順の混成にはロシア語による影響が考えられるので、古くから全体的にSOV型語順の言語圏を形成していたものと見ることができるだろう。なお、朝鮮および日本は、地理的にはしばしば東アジアに入れられているが、語順に関しては、朝鮮語、アイヌ語、日本語、琉球語のいずれも、むしろアルタイ、旧シベリア諸語と共にユーラシア北部のSOV型地域に連続する。

インド亜大陸とも呼ばれる南アジアには、南部にドラビダ語族、北部にインド・アーリア諸語、その北にチベット・ビルマ諸語、北西部にイラン諸語、インド国内の北東部にムンダ諸語が分布する。この地域は、Masica (1976) により指摘されているように、系統の違いを越えて、種々の言語

特徴を共有する言語連合を形成しており、語順に関しては、SOV 型の連続地帯となっている[9]。現在は、一部を除いて大部分が南部に分布するドラビダ語族は、おそらく寒冷化に伴って、5,500 年前頃に、イラン東部からインド半島北西部に移住し、インド・アーリアの侵入以前には、広く北部に住んで、インダス文明を形成していたと考えられている（鈴木 1990, 28, 102)。このドラビダ語族は、本来的に整合的 SOV 型以外の語順を考える根拠はなく、これが、比較的緩やかな SOV 型を元来持っていたと見られるインド・イラン諸語（南アジアのイラン諸語は SOV 型）の整合的 SOV 型語順を強化し、さらに、それらが、本来 VO 型語順を持った可能性のあるオーストロアジア語族に属するムンダ諸語の語順まで、SOV 型に変えるに至ったのだろう。また、チベット・ビルマ諸語は、整合的ないし準整合的な SOV 型を持つが、チベット・ビルマおよびムンダについては、次節で触れることにする。いずれにせよ、南アジアは、長い歴史を通じて全体的に SOV 型の言語圏を成してきたと見ることができる。

2.3 東アジアおよび東南アジアからオセアニア

東アジアにおける広義の中国語（シナ諸語）は、前述したユーラシア北部の整合的 SOV 型と、次に述べる東南アジアの整合的 SVO 型という、きわめて対照的な語順タイプの中間に位置して、OV 型と VO 型の混合した語順を示す。これについては、一般に、現代に近づくほど、また、北に向かうほど、OV 的特徴が多く見られるという推移が、橋本 (1978) によって指摘されている。また、中国南部からインドシナにかけて分布するミャオ・ヤオ諸語は、整合的 SVO 型（ただし、ヤオ語では、指示詞、数詞は前置修飾）である。

東南アジアでは、西部に整合的ないし準整合的 SOV 型のチベット・ビルマ諸語が分布しているが、これは、上述の南アジアの SOV 型言語圏に連続したものと見ることができる。ただし、チベット・ビルマ地域の中で東部で話されるカレン諸語は、SVO, PR, GN, NA, NR のように、むしろ VO 的な語順をとるが、これには、周辺のタイ系からの影響が考えられる。それ以外では、中央部のタイ系諸語、東部のモン・クメール諸語、南

[9]厳密には、インド・アーリアのダルディック語群に属するカシミール語は、SVO, PO, GN, AN, NR, SMA, AUXV のような、混合型の語順をとるが、巨視的に全体のパターンをとらえる本稿の目的から、敢えて、本文での言及を避けた。微視的に見た場合の細かな変異、例外への言及が欠けている点は、多かれ少なかれ、他の地域についても言えるが、小論の目的上ご容赦願いたい。

部のオーストロネシア系諸語等、いずれも整合的SVO型語順の言語が広域を占めている。

オセアニアでは、パプア諸語、オーストラリア諸語は、概ね準整合的SOV型と言える。東南アジアから連続して、ニューギニア、オーストラリア以外の大部分のオセアニア地域に広がるオーストロネシア語族は、節語順に関しては、主に周辺部で動詞初頭語順、中央部でSVOという変異は見られるが、全体的には、整合的VO型である。

以上のように、東アジアおよび東南アジアからオセアニアにかけては、北部のシナ諸語地域、チベット・ビルマ地域、ニューギニア、オーストラリアを除けば、現在は、むしろVO型語順が支配的である。しかし、この地域も時代を遡れば、少なくとも現在以上に、OV型語順が優勢であった可能性がある。

まず、中国語に関しては、上述のように、橋本によれば、時代が新しくなるにつれて、特に北部においてOV的特徴が多く見られるようになったということであるが、中国語全体の長い歴史の中で見れば、元来はSOV型で、そこからSVO型になり、その後またSOV型へ向かっていくような通時的推移を想定し得るという論考が、Li and Thompson (1974) にある。

さらにシナ・チベットまで遡って考えれば、シナ・チベット祖語の語順は、SOV型であったという可能性も指摘されている（西田 1989a, 185; 1989b, 816-18; DeLancey 1987, 806-809)。歴史的に見ても、中国語は、タイ系、アルタイ系、チベット・ビルマ系等、種々の言語が、しばしば文字を媒介にしつつ、相互に影響、混交しながら成立してきたと考えられ、いわゆる一枚岩的な言語でないことは、諸家の指摘するところであり（橋本 1983 参照)、中国語が本来の語順を反映している可能性は比較的低いと考えられる。上記の西田は、シナ・チベット語族に、シナ諸語、チベット・ビルマ諸語の他、タイ諸語、ミャオ・ヤオ諸語を含めている。後2者の帰属については、議論の分かれるところでもあるが[10]、もし、西田の言うように、これら4つのグループを包括する意味でのシナ・チベット語族の祖語がSOV型であったという可能性が認められるのであれば、今日、東アジア

[10] 西田と同様の分類は、橋本 (1981) などにもあるが、一般に、中国の学者、および日本でも特に中国語やチベット・ビルマ語の研究者によく見られるようである。他方、特に欧米の学者の中には、たとえば Benedict(1975) のように、タイ諸語、ミャオ・ヤオ諸語を、シナ・チベット語族から切り離し、オーストロネシア諸語に結びつけて、オーストロ・タイのような語族を想定する説も行われている。事実、DeLancey (1987) の方は、シナ・チベット語族に、シナ諸語とチベット・ビルマ諸語だけを含めている。さらに、厳密には、特にカダイ諸語の帰属をめぐって、より複雑な系統問題があるが、本稿で扱う語順の問題には直接の関係がないので、省略する。

および東南アジアにおいてSVO型ないしそれに近い語順を持つ言語の相当部分が、結局SOV型語順に遡り得ることになり、これらに現在見られるSVO型語順は、後の発達であって、本来的なものではないことになる。

オーストロアジア語族の中で、インドシナ半島東部を中心に分布するモン・クメール諸語は、インド北東部において整合的SOV型を示すムンダ諸語とは対照的に、整合的SVO型の語順を持つ。ムンダ諸語が、先述のように、周辺のドラビダ諸語やインド・アーリア諸語と共にSOV型の言語連合を成すのと同様に、一見、モン・クメール諸語も周辺のタイ系諸語との接触でSVO型語順を持つようになったように見える。特に、ベト・ムオン諸語などは、他のモン・クメールと異なり、声調を発達させるなど、かつてはタイ系と見紛われたほど、タイ諸語や漢語の影響を強く受けていることは事実である。しかしながら、オーストロアジア語族が本来SOV型であったとすれば、南アジアのSOV型言語圏の周辺部アッサムに分布するモン・クメールの言語（カシ諸語）は、むしろSOV型が予想されるにもかかわらず、インドシナ東部のモン・クメールと同様に整合的SVO型を持っていることが理解し難いことになる。また、Lehmann (1973, 57) は、オーストロアジア祖語がVO型で、ムンダの方がSOV型に変化した可能性を論じており、また、三上 (1992, 390) も、「合成語（名詞＋名詞）や、人称接辞が名詞を限定する構造において [修飾語が被修飾語の後に置かれる例も] みられることがあり、古態の残存の可能性を示唆する事例として興味深い」ことを指摘している。三上のあげている構造体は、古い語順の徴証としてしばしば取り上げられるもので、やはり、ムンダの側にVO型からOV型への変化を想定すべきであろう。

オーストロネシア語族は、鈴木 (1990, 41-58) によると、およそ5,000年前と3,500年前に、おそらくユーラシア大陸東部の寒冷化による民族の南下によって、モンゴロイド系の人々が、ユーラシア南東部から海洋に乗り出して、拡散したものである。同語族では、前述のように、整合的VO型語順がオセアニアの広大な地域の島々を占有している。一部、ニューギニア沿岸地域にSOV的な語順も見られるものの、これにはパプア諸語からの影響が指摘されており（崎山 1986）、やはり、オーストロネシア祖語はVO型語順を持っていた可能性が高い。しかしながら、上の年代から明らかなように、同語族のVO型語順が今のような広大なオセアニア地域を覆うようになったのは、むしろ比較的最近の出来事にすぎない[11]。もちろ

[11] ちなみに、イースター島、ハワイ島、ニュージーランド島、マダガスカル島といった最

ん、オーストロネシア語族の話し手の移住先がすべて無人島であったわけではなく、少なくとも東南ソロモン諸島やニューヘブリデス諸島のあたりまでは、既に先住のオーストラロイドの人々が住んでいたと言われている(鈴木 1990, 58; 石川 1987, 100-108)。しかし、オーストラロイド系の人々の言語は、次に述べるように SOV 型であった可能性が高く、また、その他の無人島では、オーストロネシア系の言語が当然、最初の言語となるので、結局、オセアニアにおける VO 型語順の広がりは、比較的最近のものということになる。

大林 (1984, 60) によると、オーストラロイド的特徴を持つ集団は、現在の東南アジアにはもはや見出されないということであるが、数万年前（6万年前から3万年前まで諸説）に、当時陸続きであったニューギニアおよびオーストラリアに、ユーラシア大陸南東部から渡来したという点については、諸家の見解が一致している（石川 1987)。これらの言語は、前述のように、大部分準整合的 SOV 型の語順を持ち、特に語順変化した痕跡も見出されないようなので、元来、整合的ないし準整合的な SOV 型の語順を持っていたと見てよいであろう。

以上のように、東アジアおよび東南アジアからオセアニアにかけた地域において、VO 型の祖語を持っていたと想定されるのは、オーストロアジアとオーストロネシア、すなわち、Schmidt(1906) の言う意味での、狭義のオーストリック語族である[12]。オーストロネシア語族の源郷については、言語の分岐度の高さから、台湾やメラネシアを想定する説もある。しかし、これらが第2，第3の故地となった可能性はあっても、オーストロネシア語族全体の究極的な源郷は、先の鈴木と同様に、ユーラシア大陸南東部に求める説が、現在では最も有力視されているようである（石川 1987)。一方、大林 (1984, 72) によると、オーストロアジアの故地は、今なお不明ということだが、ヒマラヤ東部、アッサム、雲南北東部あたりが、その候補にあげられるようである。オーストロネシアとオーストロアジアの同系説の当否はさておいても、これらの言語は、比較的古い時代から、ユーラシア大陸南東部において、VO 型語順を持つ言語として存在したものと見て

も周辺の島々に達したのは、それぞれ、紀元 400 年、500 年、800 年、400 年（旧説では紀元前 1000 年）頃と想定されている（鈴木 1990, 45-51)。

[12] これに対して、広義のオーストリック語族とは、Ruhlen (1987) で行なわれているように、オーストロネシア諸語、タイ諸語、ミャオ・ヤオ諸語をオーストロ・タイ語族として関係づけた Benedict (1975) の説を受け、さらに、オーストロアジア諸語を含めて、それら全体をオーストリック語族とするものである。この意味でのオーストリックは、Benedict が初期に想定していたものに近いが、Benedict 自身は、その後、系統的にオーストロアジア諸語を含めることには、否定的立場を取るようになっていった (Ruhlen 1987, 151-56)。

よいだろう。しかし、やはり同様の地域に故地を持つと言われるオーストラリア諸語およびパプア諸語は、SOV 型語順を持つことから、さらに時代を遡れば、この地においても SOV 型語順が主流を占めていた可能性も考えられる。

2.4 アフリカ大陸

アフリカ大陸北部から西アジアにかけて広がるアフロアジア語族は、エジプト、セム、ベルベル、チャド、クシ、(オモ) という、5つないし6つの語派から成るが、オモ諸語については、西クシ諸語としてクシ語派の中に含められるか否か議論が分かれるところである。これらのうち、クシ諸語、オモ諸語は整合的 SOV 型の語順を示すが、それ以外は、大部分、整合的 VO 型の語順を持つ。すなわち、ベルベル諸語、エジプト語は VSO 型 (コプト語は SVO 型)、チャド諸語は SVO 型である。セム諸語については、古いセム語は、アッカド語が前述のようにシュメール語の影響で SOV の節語順を持つことを除けば、一般に VSO 型であり、新しいセム語は、エチオピアのセム語がクシとの接触で一部に SOV 的語順を持つことを除けば、現代ヘブル語、現代アラビア口語のように節語順は SVO になったものが多いものの、全体的に、整合的 VO 型が多い。アフロアジア祖語の語順については、今なお推測の域を出ないが (Hetzron 1987, 652)、たとえばチャド語派にもかつての VSO からの変化が指摘されており、やはり、VSO 型であった可能性が最も高いようである (Newman 1987, 708; Heine 1976, 62)。アフロアジア諸語の源郷については、西アジアの所でも述べたように、サハラ地方に起源を持つという説があり、アフロアジア祖語が、この北アフリカの地において、記録から知られる範囲では、世界でも最も早い時期に VO 型語順を示し、それが、その後、セム語を通じて、西アジアにも拡大していったのではないかと考えられる。

ナイル・サハラ語族は、上述のアフロアジア語族と、次に述べるニジェール・コンゴ語族という2つの大きな語族に挟まれた地域にあって、アフリカの語族中、最も多様な語順を示す。内部の小さな語派の中では、比較的均質な語順を抽出することは可能であるが、SVO、SOV、VSO など、種々の語順タイプの言語が存在し、語族全体としての語順の一般化は困難であり、また、研究も十分に進んでいない。そのため、部分的には、たとえばナイル語派 (現在、VSO または SVO の VO 型) の祖語として、SVO 型語順を想定する説なども見られるが (Heine 1976, 63)、ナイル・サハラ

祖語の語順を再建し得るまでには至らない。ただ、この語族は、古くはナイル川中流域の比較的狭い範囲に分布していたらしく、アフロアジア語族やニジェール・コンゴ語族ほど、広域に広がることはなかったようである (Comrie, et al. 1996, 74-77)。

ニジェール・コンゴ語族は、概して、準整合的SOV型語順を持つ西アフリカのマンデ諸語以外は、整合的SVO型の大きな地理的まとまりを成している。特に、バンツー諸語、アダマワ・ウバンギ諸語、大西洋諸語は大部分、整合的SVO型語順を持ち、マンデ諸語とSVO型語順地域との中間に分布するクワ、クル、グル諸語は、それらの中間的な混合型語順を示すことが多い。その他、ニジェール川河口のデルタ地帯に分布するイジョー諸語は、整合的SOV型を持つ点で、特異である。このように、現在、整合的SVO型の広い連続地帯を構成するニジェール・コンゴ語族の祖語の語順に関しては、Givón (1975) やHyman (1975) のようにSOV型であったとする説と、Heine (1976, 61) のようにSVO型であったという説があるが、近年、SOV型という説の方が有力になりつつあるようである (Williamson 1989, 28)。先に言及したイジョー諸語は、クワ語派に入れられていたこともあるが、最近では、クワ語派やベヌエ・コンゴ語派よりも古い時代に、ニジェール・コンゴ祖語から分かれた1語派と考えられており (清水 1988, 583)、この本来の語順を保持しているのかもしれない。また、現在は、赤道以南の大部分の地域をSVO型語順で占めているバンツー諸語も、元来は、西アフリカの一隅に位置していたもので、サハラ砂漠の拡大により、約3,000年前から2,300年前にかけて東進し、その後、紀元100年から400年の間に南下し、およそ11世紀までに現在の分布域を占めるに至ったと考えられている (鈴木 1990, 34-40)。したがって、この地域におけるSVO型語順の広がりは、比較的最近の事象と見ることができる。

コイサン語族は、現在は、大部分、アフリカ南西部の比較的狭い領域に限られているが、それらの語順はそれほど均質的ではない。北部コイサン諸語は、SVO, PO, GNで、その他の修飾語は被修飾語の後に置かれる。南部コイサン諸語は、これと同様のタイプか、または整合的SVO型を取る。それに対し、中央コイサン諸語は、整合的SOV型である。コイサン諸語は、こうした地理的位置から、一部、周辺のバンツー系からの影響で、SVO型語順が入ってきた可能性が考えられる。そのほか、タンザニアに残存するサンダウェ語およびハヅァ語を見ると、前者は準整合的SOV型

を取り、後者は概ね整合的なVSO型を持つが、後者には、周辺のナイル系、特にマサイ語からの影響が指摘されている (Wald 1994, 294)。そこで、コイサン語族の語順は、元来SOV型で、VO的語順特徴は、後に周辺の言語による影響で獲得したものである可能性が高い[13]。また、コイサン語族は、バンツー系の拡大以前は、より広い地域を覆っていたと考えられていることから、かつては、SOV型語順が赤道以南の広い地域を占めていた可能性がある[14]。

以上のほか、たとえば、バンツーの拡大以前はザイール川流域を中心に広く分布していたピグミー族についても、本来は固有の言語を持っていたと言われているが、すべてバンツー語に置き換わってしまったため、当然、語順についても、全く不明である。しかし、こうした不明の点を残しつつも、以上のように、ニジェール・コンゴ語族や、コイサン語族の祖語がいずれもSOV型であった可能性が高く、現在の赤道以南のSVO型語順の広がりが、比較的近年の移動によるものであることなどから、現在ではVO型語順が支配的なアフリカ大陸についても、かつて、SOV型語順が少なくとも現在より広い分布を取っていたという可能性は、やはり否定し難いだろう。

2.5 アメリカ大陸

アメリカ先住民語は、しばしば多総合的な構造を持ち、文法的な語順の自由度の高い言語も少なくないことから、基本語順の設定が必ずしも容易ではない。しかし、小さな変異を除いて、巨視的にアメリカ大陸全体の基本的語順のパターンを見た場合、VSO型を取る北西太平洋岸とSVOや動詞初頭型語順を持つ中米を除けば、全体的に、SOV型、特に準整合的SOV型語順がアメリカ大陸の大半を占めることがわかる。このように、SOV型語順がアメリカ大陸で支配的であることから、その他の語順は、アメリカ大陸に元来の語順タイプとして存在したものではなく、むしろ後の時代の改新による可能性がある。モース語族として総称されることもある、北西太平洋岸のセイリッシュ、ワカシュ、チマクムといった言語群は、多総合的構造を反映して、元来はSOVとしても自由度の高い語順から、後に

[13] Heine (1976, 63) も、最良の推測と断りつつ、コイサン祖語の語順をSOV型としている。

[14] アフリカの民族、言語の古い時代の分布図については、Comrie, et al. (1996, 75) や川田 (1987, 19) などを参照。

VSO 的な語順を取るようになった可能性がある[15]。また、中米の言語に関しては、Yasugi (1995, 107-32) の中で、いくつかの語族について、SOV 型からの推移が指摘されており、さらに近年ではスペイン語からの影響もあるだろう。また、これらの地域以外のアメリカ先住民語についても、祖語に SOV 語順を設定している語族は、種々の研究において散見される。たとえば、イロコイ語族について Rudes (1984)、カリブ語族やアラワク語族について Derbyshire and Pullum (1986)、ユト・アズテク語族、ユマ語族、ポモ語族について Campbell and Mithun (1984) などがある。

さらに、アメリカ大陸先住民諸語の話し手の移住については、その時期を3万年以上前に見る説もあるが、むしろ、およそ2万年前ないし1万数千年前に、ユーラシア大陸の東北部から、いくつかの移住の波で、当時陸橋であったベーリング海峡を通って入り、約一万年前までにアメリカ大陸南端にまで達したというあたりが、概ね、諸家の意見が一致するところのようである（大貫 1984;　岡他 1991)。そこで、アメリカ先住民語の究極的な源郷であるユーラシア大陸の言語分布を顧みれば、上で見たように、古くは SOV 型の言語が主流を占めていた可能性が高い。その意味からも、アメリカ大陸における元来の語順は、やはり SOV 型であったと思われる。

3　語順の地理的分布の変遷、および言語蝟集の可能性

以上見てきたように、整合的 VO 型と準整合的ないし整合的 OV 型とが、ほぼ同等の面積を占める現在の語順分布も、かつては SOV 型語順が大部分の地域を占めており、現在、広域を占める VO 型語順は、大部分、後代に広く分布するようになったものである可能性が高い。すなわち、VO 型語順は、人類言語の長い歴史から見れば比較的最近とも言える大語族の拡散が始まった新石器時代以降、その拡散と共に、しばしば語順の改新を経験しながら、広がってきたものと考えられる。

まず、現在のヨーロッパに広がる VO 型は、印欧語が、西方で、周辺のウラル語をも巻き込みつつ、OV 型から VO 型に推移していった結果である。アフリカでは、サハラ地方で、かなり古くから VO 型語順を呈したと思われるアフロアジア語族が、北アフリカから中東に広がるに従って、

[15] 古い時代には、特に主語と目的語を共に動詞に表示するタイプが多く、文法的な語順の自由度もかなり高かった可能性があり、そのため、SOV から VSO への変異も比較的容易に起こり得たのではないかという御教示を、松本克己先生より賜った。

VO 語順が拡大した。一方、アフリカ南部では、元来、西アフリカの一隅を占めていたニジェール・コンゴ語族の中で、特に OV 型から VO 型に変わったバンツー諸語が拡散すると共に、VO 型地域が拡大していった。アジアでは、本来は SOV 型語順を持っていたシナ・チベット語族のうち、タイ諸語、ミャオ・ヤオ諸語、シナ諸語が VO 的な語順に変化するに従い、VO 的語順の言語圏が東南アジアおよび東アジアに広がったと考えられる。さらに、東南アジアないしユーラシア大陸南東部の中で、比較的早期から VO 型語順を示した可能性を持つオーストロアジアおよびオーストロネシア語族（あるいは狭義のオーストリック語族）のうち、オーストロネシア語族が海洋に乗り出し、既に SOV 型の言語圏を成していたニューギニアおよびオーストラリアを除く、広大なオセアニア地域に、VO 型語順の連続帯を形成していった。また、アメリカ大陸も元来は SOV 型語順で、後代、北西太平洋岸や中米で、一部に VO 的語順が生じてきたものと考えられる。

さらに、大航海時代以降、ヨーロッパの言語の急激な拡大により、今日、SVO 言語が地球上の大半を占めつつあるのは、周知の事実である。したがって、まず、SOV 型語順が大部分を占めていた時代から、特に新石器時代以降、VO 型語順が拡大し、大航海時代頃まで OV 型と VO 型がほぼ同等の面積を占める状態がしばらく続き、さらに近年になってから SVO 語順が急速に拡大しつつあるというのが、語順から見た、人類言語の地理的分布の大きな流れであると言えよう。ただし、最後の SVO 語順の拡大は、人類言語史上かつて例を見ないほど、短期間のうちに急激な勢いでヨーロッパの言語が世界的な拡大をしたことによる、むしろ社会的、政治的な側面が強い現象であるため、人類言語自体の本質的特性を考える上での重要性は、比較的低いものと考えられる。そこで、本稿では、やはり、ヨーロッパ諸語が欧州の外に拡大していない状態を、便宜上、現在の分布として見ておくのが妥当であろう（注2参照）。

その他、語順における地理的分布の変遷を考える上で避けて通れない問題として、言語蝟集という問題がある。すなわち、今日大きな広がりを持った語族は、主として新石器時代以降に先住の諸言語をのみ込みつつ、拡大したものであって、それ以前は、互いの系統づけの困難な種々の言語が蝟集しているような状況が、むしろ常態であったという可能性が言われてきている（松本 1994; 宮岡 1992, 序, 49-51 など）。この捉え方自体は、実際、当を得たものと思われる。しかしながら、語順に関して言えば、種々

多様な語順タイプが蝟集していた可能性は、むしろ低いと考えられる。これは、無論、直接的な実証が不可能な問題であるが、言語が蝟集する状況が、今日残されている、あるいは近年まで残っていたと思われる地域の語順分布などを基に、当時の状況を推量することは可能である。すなわち、そのような地域としては、旧シベリア諸語地域、コーカサス、ニューギニア、オーストラリア北部、アメリカ大陸の特に北太平洋沿岸地域などが挙げられるが、これらの地域に蝟集する言語は、いずれも、語順に関しては概ね斉一的で、いずれも整合的ないし準整合的SOV型で共通している[16]。また、整合的VO型と準整合的ないし整合的OV型が、しばしば系統の違いを越えて、地球上で広い範囲に連続地帯を形成しているという現在の地理的分布からも明らかに見て取れるように、(整合的) 語順というのは、人類言語の種々の特性の中でも、最も地理的に言語連合を形成しやすい特性の一つと言える。しかも、本稿で見てきたように、現在記録の残っている言語から遡り得る限りでは、大部分、SOV型語順にたどり着く。したがって、たとえ大語族の拡散以前は言語蝟集が常態であったとしても、やはり、SOV型語順が地球上の大部分の地域を占めていた可能性が、最も高いものと考えられる。

4 分布に対する説明

以上見たように、かつては地球上の大部分の地域をSOV型語順が覆っていたとすれば、やはり、そこには何らかの理由が存在するはずである。ただし、節語順に限らない全体的な語順類型としては、いわゆるVO型とOV型との間に、それらが整合的である限り、何ら本質的な優位差はないと考えられる。すなわち、言語内的に見ても、伝統的に語順類型論で言われてきたように、主要部と限定ないし修飾要素、支配項と被支配項といった関係において、いずれのタイプも配列上の一貫性を保っている点において同等である。さらに、新石器時代以降、大語族が拡散を開始して、その拡散が一通り落ち着いてから、比較的長い期間安定した分布状態であると考えられる現在の地理的分布においても、整合的VO型と(準)整合的OV型とは、ほぼ同等の面積を占めており、また、現在、統計的にもOV型とVO型との間にはほとんど差が見られない。すなわち、こうした地理的および統計的な分布といった言語外的な観点から見ても、やはり、VO

[16] ただし、先に見たように、アメリカ大陸北太平洋沿岸地域のうち、北西太平洋岸だけはVSO型だが、これについては、前述のように、むしろ改新の可能性が考えられる。

型とOV型が本質的に同等のものであることが示唆されているように思われる。

そこで、かつてSOV型語順が大部分を占めていた理由の説明は、むしろ、その節語順に求められるように思われる。実際、節語順に関しては、統計的にも地理的にも、その現れに明らかな差が見られ、古い時代に自然な節語順としてSOVが圧倒的に現れやすいことが言えれば、それ以外の語順特徴も節語順と同様のOV型で整合しやすい傾向があることから、結局SOV型が支配的であった理由が説明されるであろう。

節語順は、筆者の語順資料においても、SOV = 48%, SVO = 38%, VSO = 10%, VOS = 3%, OVS = 0.8%, OSV = 0.3%のように、その統計的分布に大きな偏りが見られ、特に、Greenberg(1963, 77) が指摘したように、SがOに先行する基本語順が圧倒的多数を占める。この理由について、筆者は、心理学で言うところの図と地の観点から、以前、次のような説明をした (Yamamoto 1987, 36-37)。すなわち、原型的な他動詞構文においては、主語が動作主で、目的語が被動者である。そこで、動作が展開する初期では動作主が図となり、後半に近づくに従って被動者が図となるという、参与者の認知的顕著さの相違を、言語の上で類像的に表現すれば、SがOに先行する語順が自然である。したがって、とりわけ文法的な語順の自由度が比較的高かったと思われる古い時代に、最も自然に現れやすい語順は、SOV、SVO、VSOと言ったSO語順で、その逆のOS語順を基本語順に取る言語は、ほとんどあり得なかったのではないかと思われる。

また、Tomlin (1986) の言うところの、Theme First Principleや、Verb-Object Bondingと言った観点から、VSO語順も比較的現れにくかった可能性がある。前者は、動詞よりも名詞句、特に主語が主題に成りやすいことから、主語が文頭に現れやすいという原理で、後者は、動詞と目的語の結びつきの強さから、両者が近接して現れやすいという原理である。すなわち、SOVとSVOは、この両方に従っているので自然な語順として生じやすく、VSOは、いずれにも反しているので現れにくいということである。

以上のことから、古い時代に、自然に現れやすい節語順の候補としては、SOVとSVOが考えられることになる。しかし、SVO語順に関しては、本来、言語接触等により、多数の非母語話者によって取り入れられたり、広域に使われるようになった場合に現れやすい語順であるという指摘がある (Lehmann 1992, 249)。そこで、先に触れたように、新石器時代

に入る前には、特定の言語が広域に拡大することがほとんどなく、比較的緩やかな収束と分岐を繰り返しつつ、種々の言語が蝟集していたという可能性に照らして考えれば、古い時代に SVO 語順が現れる可能性は低かったものと考えられる。

したがって、比較的語順の自由度が高かった古い時代において、最も自然に現れやすい語順として残るのは SOV 語順ということになり、さらに整合性によって、結局は、SOV 型語順が大多数を占める分布になったのではないかと思われる。

5 結び

現在の語順分布は、整合的 VO 型と (準) 整合的 OV 型とが、それぞれ広大な言語圏を形成しつつ、ほぼ同等の面積を占めており、これは、主として新石器時代以降に起こった大語族の拡散が一通り落ち着いてから、比較的安定した分布であった。しかし、この分布も、本稿で見たように、現在の言語および記録の残っている言語により、通時的に遡っていけば、VO 型語順を持つ地域というのは、きわめて限られており、かつては、地球上の大部分の地域が SOV 型の言語で占められていた可能性が最も高い。現在、広域を占める VO 型語順は、大部分、比較的近年になってから、大語族が拡散し始めた新石器時代以降に、しばしば語順の改新を伴いつつ、その拡散に従って広がってきたものと考えられる。

実際、現在は OV 型を取らない言語群も含め、祖語が SOV 型語順として再建される語族が多く、死滅した言語にも、しばしば SOV 語順が検証されている。また、新石器時代に入る前はむしろ常態であったと考えられる言語の蝟集を示す地域にしても、そのほとんどが、SOV 型の言語圏を形成している。さらに、SOV 型語順には、文法的語順の自由度が比較的高かった時に最も自然に現れやすいことを示唆する言語内的な要因もある。したがって、やはり、かつては SOV 型語順が地球上の大半を覆っていたという可能性が、最も高いものと言えよう。

【付記】

研究の方向性等に関し、種々の貴重な御助言を下さった松本克己先生、柴谷方良先生、および、語順の地理的分布について英文で書いた筆者の草稿に対して懇切なコメントを下さったバーナード・コムリー先生に、衷心

より謝意を表する。なお、本研究は、一部、文部省科学研究費補助金（基盤研究C, 1997〜99年度）の助成を受けている。

【参照文献】

Anderson, J. M., and C. Jones, eds. 1974. *Historical Linguistics, Vol. 1.* Amsterdam: North-Holland Publishing Company.

Benedict, Paul K. 1975. *Austro-Thai: Language and Culture.* New Haven: HRAF Press.

Campbell, Lyle, and Marianne Mithun, eds. 1979. *The Languages of Native American.* Austin: University of Texas Press.

Comrie, Bernard, ed. 1987. *The World's Major Languages.* London: Croom Helm.

—. 1989. *Language Universals and Linguistic Typology.* 2nd ed. Oxford: Basil Blackwell. (松本克己・山本秀樹共訳『言語普遍性と言語類型論』ひつじ書房 1992)

—, Stephen Matthews, and Maria Polinsky, eds. 1996. *The Atlas of Languages: The Origin and Development of Languages throughout the World.* New York: Facts On Files, Inc.

DeLancey, Scott. 1987. 'Sino-Tibetan Languages.' Comrie (ed.), 797-810.

Derbyshire, Desmond C., and Geoffrey K. Pullum, eds. 1986. *Handbook of Amazonian Languages, Vol. 1.* Berlin: Mouton de Gruyter.

Givón, Talmy. 1975. 'Serial Verbs and Syntactic Change: Niger-Congo.' Li(ed.), 47-112.

Greenberg, Joseph H. 1963. 'Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements.' *Universals of Languages.* Ed. Joseph H. Greenberg. Cambridge, MA: MIT Press (2nd ed., 1966), 73-113.

橋本萬太郎 1978 『言語類型地理論』弘文堂

—. 1981 「シナ・チベット諸語」北村甫編『世界の言語』大修館書店, 149-70頁

— 編 1983 『民族の世界史 5 : 漢民族と中国社会』山川出版社

Hawkins, John A. 1983. *Word Order Universals.* New York: Academic Press.

—. 1994. *A Performance Theory of Order and Constituency.* Cambridge: Cambridge University Press.

Heine, Bernd. 1976. *A Typology of African Languages Based on the Order of Meaningful Elements.* Berlin: Dietrich Reimer Verlag.

Hetzron, Robert. 1987. 'Afroasiatic.' Comrie (ed.), 645-53.

Hyman, Larry M. 1975. 'On the Change from SOV to SVO: Evidence from Niger-Congo.' Li (ed.), 113-48.

石川栄吉編 1987 『民族の世界史 14 : オセアニア世界の伝統と変貌』山川出版社

川田順造編 1987 『民族の世界史 12 : 黒人アフリカの歴史世界』山川出版社

Lehmann, Winfred P. 1973. 'Structural Principle of Language and Its Implication.' *Language* 49: 47-66.

—. 1974. *Proto-Indo-European Syntax.* Austin: University of Texas Press.

—. 1992. *Historical Linguistics.* 3rd ed. London: Routledge.

Li, Charles N., ed. 1975. *Word Order and Word Order Change.* Austin: University of Texas Press.

—, and Sandra A. Thompson. 1974. 'Historical Change of Word Order: A Case Study in Chinese and Its Implications.' Anderson and Jones (eds.), 199-217.

Masica, Colin P. 1976. *Defining a Linguistic Area.* Chicago: University of Chicago Press.

松本克己 1975 「印欧語における統語構造の変遷 : 比較・類型論的考察」『言語研究』第 68 号, 15-43 頁

—. 1994 「日本語系統論の見直し : マクロの歴史言語学からの提言」『日本語論』11 月号, 36-51 頁

三上直光 1992 「ムンダー諸語」『言語学大辞典第2巻』三省堂, 388-91 頁

宮岡伯人編 1992 『北の言語：類型と歴史』 三省堂

Newman, Paul. 1987. 'Hausa and Chadic Languages.' Comrie (ed.), 705-23.

西田龍雄 1989a 「シナ・チベット語族」 『言語学大辞典第2巻』 三省堂, 167-87 頁

—. 1989b 「チベット・ビルマ語派」 『言語学大辞典第2巻』 三省堂, 791-822 頁

岡正雄・江上波夫・井上幸治編 1991 『民族の世界史1：民族とは何か』 山川出版社

大林太良編 1984 『民族の世界史6：東南アジアの民族と歴史』 山川出版社

大貫良夫編 1984 『民族の世界史13：民族交錯のアメリカ大陸』 山川出版社

Rudes, Blair A. 1984. 'Reconstructing Word Order in a Polysynthetic Language: From SOV to SVO in Iroquoian.' *Historical Syntax.* Ed. Jacek Fisiak. Berlin: Mouton, 471-508.

Ruhlen, Merritt. 1987. *A Guide to the World's Languages, Vol. 1: Classification.* Stanford: Stanford University Press.

埼山理 1986 「オーストロネシア語族とパプア諸語の言語接触：とくに語順変化について」 『国立民族学博物館研究報告』 第11号－2, 355-82 頁

Schmidt, Wilhelm. 1906. *Die Mon-Khmer-Völker, ein Bindeglied zwischen Völkeren Zentralasiens und Austronesiens.* Braunschweig.

清水紀佳 1988 「イジョイド語群」 『言語学大辞典第1巻』 三省堂, 582-83 頁

鈴木秀夫 1990 『気候の変化が言葉を変えた：言語年代学によるアプローチ』 日本放送出版協会

Tomlin, Russel S. 1986. *Basic Word Order: Functional Principles.* London: Croom Helm.

Vennemann, Theo. 1973. 'Explanation in Syntax.' *Syntax and Semantics, Vol. 2.* Ed. J. P. Kimball. New York: Academic Press, 1-50.

—. 1974. 'Topics, Subjects, and Word Order: From SXV to SVX via TVX.' Anderson and Jones (eds.), 339-76.

Wald, Benji. 1994. 'Sub-Saharan Africa.' *Atlas of the World's Languages.* Eds. Christopher Moseley and R. E. Asher. London: Routledge, 289-309.

Williamson, Kay. 1989. 'Niger-Congo Overview.' *The Niger-Congo Languages.* Eds. John Bendor-Samuel, and Rhonda L. Hartell. Lanham: University Press of America, 3-45.

矢島文夫編 1985 『民族の世界史 11 : アフロアジアの民族と文化』山川出版社

Yamamoto, Hideki. 1987. 'Toward a Natural Explanation for Typological Phenomena around Passives and Ergatives: An Interaction of Syntactic Pivot, Informational Structure and Viewpoint.' 『言語研究』第 92 号, 33-55 頁

山本秀樹 1996 「世界諸言語の語順類型論地図」 『月刊言語』2 月号, 13-17 頁

Yasugi, Yoshio. 1995. *Native Middle American Languages: An Areal-Typological Perspective.* Senri Ethnological Studies 39. Osaka: National Museum of Ethnology.

History of areal distribution of word order around the world

Hideki YAMAMOTO

When the current areal distribution of word order is viewed synchronically, we find that only two or three word order types, namely, consistent VO and (sub)consistent OV types occupy vast areas on the globe. Furthermore, the areas of VO type are almost as large as those of OV type.

When the distribution is considered from a historical point of view, however, it is very likely that most of the areas had been covered with (S)OV-type languages and that the areas of VO type had been very restricted before the expansion of large language families after the Neolithic age. In fact, the proto-languages often turn out to have SOV-type order in a number of language groups, including those which currently take word order patterns other than OV type. The word order of a number of extinct languages is often found to have been SOV. Moreover, almost all the languages share SOV pattern in those areas where many genetically different languages are crowded, which can be considered to have been normal state in old days. In fact, SOV type is the pattern which is most likely to appear naturally, especially when the word order is not so grammatically rigid. Thus, SOV-type word order is most likely to have occupied the greater part of the earth.

hideyama@cc.hirosaki-u.ac.jp